

○セラフィーナ、お忍び中にシリウスにナンパされる(300年前)

これは、私が16歳の時の話だ。

「カノープス、シエアト、行きましょう」

王城にて、私服に着替えた2人の騎士を振り返ると、私は笑顔で声を掛けた。すると、一瞬の沈黙の後、カノープスは返事をしたのだけれど……

「承りました」

一方のシエアトは返事をすることなく、激しい調子でカノープスを詰り始めた。

「おい、カノープス！ 優れた騎士の条件は、何事にも唯々諾々と『応』と答えることじゃないぞ！ 時には主君を諫めることも必要だからな！！」

それから、2人は言い合いを始めてしまった。

困ったわねと思いつつも、よく見る光景だったので、言葉を差し挟まずに成り行きを見守っていると、珍しくカノープスが荒げた声を上げる。

「その諫める場面が今だと思ってるのならば、お前がやるんだな！」

「それは……」

「できないのなら、私に押し付けるな！！」

「……ぐう」

私はこれからカノープスとシエアトとともに、お忍びで王都を探索する予定になっていた。

元々、私が身分を隠して王都を探索したいと希望したのが始まりだけれど、1人では危険だということ、護衛騎士のカノープスと近衛騎士のシエアトに同行してもらうことになったのだ。

そのため、3人ともに平民服を着用して、さあ、出掛けるわよとなったところで言い合いが始まってしまった。

けれど、すぐにシエアトが言い負かされる形で決着がついたため、改めて出掛けようとしたところ、そのシエアトが私に引き直り熱心に訴えてきた。

「セラフィーナ様、街へのお忍びは中止しませんか？」

「えっ、護衛人数が2人では少な過ぎるのかしら」

体格のよい男性を大勢引き連れて歩いたら怪しまれるかもしれないと思って、少ない人数に設定したのだけれど、少な過ぎたのかもしれない。

そう考えながら恐る恐る尋ねると、シエアトは首を横に振った。

「いえ、オレとカノープスが同行すれば、セラフィーナ様の身の安全は完璧に確保できます。しかし、そうではなくて、世の中にはもっと恐ろしい危険があるんですよ！ もしもたった2人の護衛しか連れずに、お忍びで出掛けたことがシリウス団長にバレたら、この世の地獄を見ることになり

ますー！」

シエアトは赤と黄の髪色をした派手な顔立ちの騎士だ。

長身で筋肉質と体格にも恵まれ、近衛騎士団の中でも指折りの強さを誇っているのに、いつだってシリウスに怯える様子を見せるところが彼のおかしなところだ。

「シエアトったら、シリウスはこれくらいで怒ったりしないわよ。そうね、私を守る近衛騎士団長という立場上、少しは怒った振りをするかもしれないけれど、あくまで振りだわ」

「あああ、本気でそんなことを言うなんて、セラフィーナ様は何一つ分かっていないですねー！」
大きな体を丸めて頭を抱えるシエアトを見て苦笑すると、私はもう1度、大きな鏡に全身を映してみた。

庶民が着用する簡易なドレス姿に、肩までの黒髪のウィッグを身に着けているため、誰一人私がセラフィーナ王女だとは気付かないだろう。

一方、護衛として付いてくるシエアトはチャラっとした派手な服を、カノープスは鮮やかな色合いの服を着用しているため、こちらも騎士に見えないはずだ。

つまり、私たちが王女や騎士だと見抜かれるはずはないのだから、シエアトの心配は杞憂に終わるだろう。

「シエアトはいつだって自信満々なのに、シリウスに関しては心配性よね。あなたがあんまり言うから、用心に用心を重ねて、シリウスが用事で王都の外に出る日を狙ったというのに、まだ何か心配事があるのかしら？」

「セラフィーナ様案件ということが、既に心配事ではないんですよ！ シリウス団長はいつだって、セラフィーナ様に関することには、神がかって鋭いじゃありませんか！ オレだって、冷静な頭でこの計画を何度も見直しました。そのうえで答えると、今日のお忍び計画は完璧だと思いますし、絶対にシリウス団長にはバレないと思います。が、それでも、きつとバレるんですよー！」

シエアトの言っていることは滅茶苦茶だわ、と思いながら意見を求めるようにカノープスを見ると、彼は生真面目な表情で口を開いた。

「シエアトの発言には何の根拠もありませんので、信用に値するものではありません。それでも、私も今回のお忍びは遅かれ早かれ、シリウス団長に露見すると思います」

「まあ」

シエアトだけではなく、カノープスまでおかしなことを言い出したわよ。

そう思ったけれど、何の根拠もない言葉を元に探索を中止するわけにはいかない。

私は笑顔で2人を見やると、「じゃあ、見つかる前に楽しみましょう」と言いながら、2人の背中を押し出したのだった。



結論から言うと、街探索は大成功だった。

誰一人私が王女だと気付く者はいなかったし、人々の普段の生活を垣間見ることができたし、私にとっては楽しかったからだ。

夕食にと、屋台で買った肉串を食べながら、私はシエアトに笑いかける。

そこは路上に簡単なテーブルと椅子が並べてある、居並ぶ屋台の料理を食べるための場所だった。「ね、シエアト、問題なかったでしょう？」

「それはオレが死ぬ間際まで分かりませんよ。あああ、オレはこれから死ぬまで、いつ今日のことかシリウス団長にバレるのかと、ドキドキしながら毎日を過ごさないとイケないのです」

果たしてシエアトはそんなに繊細なのかしらと思いつつも、無言で串にかぶりついていると、後ろから声を掛けられた。

「こんにちは、お嬢さん」

振り返ると、明らかに身なりのいい男性と、その従者らしき男性の2人組が立っていた。

「私はオーデュボン男爵だ。君を我が屋敷に招待しよう」

初対面にもかかわらず、オーデュボン男爵はもったいぶった口調で、いきなり私に誘いかけてきた。

「えっ、い、いえ、結構よ」

男爵ということは貴族で、お家に招待されたということは私が王女だとバレたのかしら。

そう焦りながらもきっぱりと拒絶すると、オーデュボン男爵はむっとしたように顔を歪めた。

「私から誘われる荣誉を理解していないのか？ これだから平民はなつてないんだ」

男爵は呆れたように頭を振ると、腕を伸ばしてきて私の腕を掴もうとした。

とっさにカノープスとシエアトが私の前に立ちふさがったけれど、2人が男爵を諫めるよりも早く、彼の後ろから腕が伸びてきてがしりとその腕を掴む。

「え？ な！？」

そして、オーデュボン男爵が戸惑ったような声を上げると同時に、その腕がごきりと鳴って、体が空中で一回転した。

「ぎゃあああああ！！！」

オーデュボン男爵は片腕を抱きかかえながら地面をゴロゴロと転がると、断末魔のような悲鳴を上げる。

はっとして視線をやると、とてもよく見知った銀髪白銀眼の男性が、男爵を無表情に見下ろしていた。

早過ぎて何が起こったのかよく見えなかったけれど、間違いなくこの銀髪の男性がどこからともなく現れ、男爵を投げ飛ばしたのだろう。

突然のことに声も出せずに目を見開いていると、彼はだんと足を振り下ろして、転げ回っている男爵の肩を踏みつけた。

「ぎいぎいぎいぎいぎいぎい……！」

再び叫び声を上げる男爵を不愉快そうに見下ろすと、銀髪の男性は興味をなさそうに尋ねる。

「どうやら腕を骨折したようだな。治療が必要だというのであれば、オレの連絡先を教えるが？」

その声は研ぎ澄まされた剣のようで、どんな愚鈍な相手でも脅迫されていることが分かるほどに冷え冷えとしていた。

相手の連絡先を知ったならば、自分の連絡先も教えなければならず、それはすなわち、目の前の魔人のような相手とつながることを意味する。

その恐ろしさを理解できるくらいには男爵は聡明だったようで、踏みつけられたままびくりと体をそらした。

「ひいひい！……ひっ……ひっ……！」

「いいいいいりません！ けけ結構です……！」

恐怖で口から泡を吹きだした男爵に代わって、彼の従者は顔面を蒼白にしながら答えると、何とか男爵に肩を貸して立ち上がらせる。

それから、ほうほうの体で逃げるように去っていった。

「ほら見ろ、ほら見ろ、ほら見ろ！ だから、オレは言ったじゃないか……！」

私の後ろでは、何かの呪文のようにシエアトが同じ言葉を小声で繰り返し始める。

一方、カノープスはぐっと奥歯を噛みしめると、叱責に耐えるかのように頭を下げた。

けれど、2人に相對した銀髪白銀眼の男性——貴族服姿のシリウスは、2人に視線をやることなく、私に片手を差し出してきた。

「こんにちは、お嬢さん」

「えっ？」

そのどことなく他人行儀な口調に目を瞬かせていると、シリウスは私の片手を手に取ってじっと眺めてきた。

「まるで王侯貴族のように手入れされた手だな」

「えっ、そ、それはだって……」

「ああ、自己紹介がまだだったな。オレはシリウス・ユリシーズ。騎士をしている」

シリウスに改めて自己紹介をされたため、一体何のつもりなのかしらと戸惑いを覚える。

「えっ、ええ、それはそうね。あの」

「名前を教えてくださいませんか？」

「えっ、私はセラフィーナ」

反射的に答えると、シリウスは小さくうなずいた。

「そうか、オレの知り合いと同じ名前だな」

「えっ？」

もしかしてシリウスは、私だと気付いていないのだろうか。

まるで初対面にするような対応を目にし、判断が付かずに首を傾げていると、後ろからシエアトが小声で囁みつくような声を出した。

「そんなわけはありませんからね！　まかり間違っても、あなた様に気付かないことなど絶対にありえませんからー!!」

「シエアトの言う通りです。絶対に気付いておられます!!」

さらに、カノープスまでが小声で助言してくる。

……そうよね。いくら黒髪のウィッグをかぶっているとはいえ、気付かないはずはないわよね。そう納得しながら、まだ夕方なのにどうして王都にいるのかしらと、疑問に思ったことを尋ねてみる。

「シリウス、思ったよりも早かったのね。今日は向こうに泊つてくると思ったのだけど」

「はは、セラフィーナは意外と馴れ馴れしいタイプなのか。まるで旧知の仲のように話しかけてくるのだな」

「えっ？」

もしかしてもしかしたら、私だと気付いていないのかしら??

再び疑う気持ちが湧いてきて、大きく首を傾げていると、カノープスとシエアトの声が揃った。

「セラフィーナ様、騙されないでくださいー!　そんなわけはありませんからー!!」

「あっ、そ、そうよね」

気を取り直してシリウスを見上げると、私は単刀直入に質問する。

「シリウス、私がセラフィーナだと分かっているのよね？」

すると、彼は両手で私の片手を包み直し、その甲に唇を押し当てた。

「ああ、もちろん、一目でこれほど魅かれるのだから、君がオレの運命の相手であることは分かっているさ。そうか、オレの相手は黒髪に金の瞳だったのか」

その声はいつになく艶を帯びていて、細められた白銀眼は熱をはらんでいるように思われる。

「シ、シ、シリウス？」

動揺して一歩後ろに下がったけれど、大股で一歩詰められてしまい、私の体が彼のそれに密着する。

「シ、シ、シリウス、くっついてるわよ」

「意図的だ」

「えええっ!？」

シリウスは一体どうしてしまったの、と困ってカノープスとシエアトに顔を向けると、2人ともに真っ青な顔で首を横に振った。

「そんな!」

どうやら助けてくれないらしい。

「なるほど、オレが口説いている最中に他の男性に助けを求めるとは、セラフィーナは多情でもあ

るのか」

「く、くど？ た、たじょう？？」

よく理解できない単語が飛び交ったため、目を白黒させていると、シリウスはさらに距離を詰めてきて、私の髪を指に巻き付けた。

「そんな多情な君に一体どれほどのことをすれば、オレだけを見てくれるのだろうか」

「シ、シ、シリウス……あなた」

「ああ、どうしてほしい？」

そう言いながら、顔を近付けられたところで……私の腰が抜けてしまった。

がくりと足の力が抜けたけれど、尻餅をつく前に力強い手に支えられる。

まん丸になったままの目で見上げると、シリウスがおかしそうににやりと笑った。

「はは、腰が抜けたか。……少しは反省したか、お転婆姫？」

「シ、シリウス！ やっぱりと分かっていたのね！！」

酷いわと声を荒げると、シリウスはどうしようもないなどばかりに肩をすくめる。

「当然だ。オレがお前に気付かないかもしれないと考える時点で、お前はどうかしている」

そう言うと、シリウスは肩に掛けていたマントを脱いで、私の上に被せた。

それから、丁寧な手つきで私を抱き上げる。

シリウスに抱かれた私は、その胸元を掴むと必死になって問いかけた。

「だったらどうして、分からない振りをしたの？」

私の質問を聞いたシリウスは、少しだけ怖い顔をした。

「オレ抜きで城を抜け出すなど、オレは事前に忠告していたはずだ。それなのに、カノープスとシエアトを付けさせれば、全ての危険を回避できると考えてお前は城を抜け出した。そうであれば、それは間違いだとお前に理解させるのがオレの役目だ」

「えっ、だから」

「ああ、オレがお前に迫った時に、あの2人は近寄っても来なかった。ほら見ろ、カノープスとシエアトが対応できない危険が存在したぞ」

得意気にそう口にするシリウスをぼかんとして見つめたけれど、私はすぐに吹き出した。

「まあ、いやだわ。シリウス、あなたは唯一の例外よ」

「例外に唯一などない。今回のような想定外の危険は他にも存在する」

「そうではなくて……あなたが相手の場合だけは、どんな危険もないと判断したのよ。私も、カノープスとシエアトも」

「……セラフィーナ？」

一体何を言い出したんだとばかりに、シリウスが困惑した様子で私の名前を呟いたけれど、私は気にすることなく話を続ける。

「ねえ、シリウス、あなたが私を傷付けることは決してないわ。絶対に、何があっても。そうだし

よう？」

そのことは私たち3人とも分かっているから、そもそもシリウスが悪漢の役をしようとしたところに無理があるのだ。

「……ああ」

シリウスもそのことに思い至ったようで、苦虫を噛み潰したような表情で答える。

私は満面の笑みを浮かべると、彼に抱き上げられた形のまま、その首に両腕を回した。

「大好きよ、シリウス。だから、私も絶対に、何があってもあなたを傷付けないわ。それから、あなたを傷付ける全てのものから守ってあげる」

シリウスはしばらく無言で私を見つめていたけれど、ふいと顔をそらした。

「……………お前は悪い魔女だな。清廉であろうとするオレをたぶらかし、ダメにする」

「まあ、私はあなたを全てから守ってあげると約束したのに、何てことを言うのかしら」

びっくりして言い返すと、シリウスは顔を戻し、酷いものを見る目で私を見つめてきた。

「分かっている。お前がちっともオレの気持ちを分かかっていないことは、きちんと分かっている。

お前はずっとそのままであってくれと、あるがままに育てたのはオレだ。だから、お前がこんな仕上がりになったのはオレのせいだ。因果応報とはこのことだな」

具体的に何を言いたいのかは分からなかったけれど、悪口を言われていることだけは理解できたため、じつりと睨みつけると、彼は諦めた様子で肩をすくめる。

それから、話題を変えるかのように空を見上げた。

「暗くなってきたな。日が落ちて寒くなるだろうから、城に戻るか？」

質問された私は、ちらりとシリウスの顔色をうかがう。

「シリウス、日帰りで王都の内と外を往復したのだから、すごく疲れているわよね？」

「騎士の体力を甘く見るなよ」

シリウスはそう言うと、抱えていた私をわざとらしく高い位置まで持ち上げた。

「本当？ 無理をしていない？ あなたさえよければ、これから一緒に夜の街を回るのはどうかしら？」

「4人ですか？」

至極当然の質問をするシリウスの前で、私は悪戯っぽい表情を作る。

「私を守るべき近衛騎士団長にこんなことを言うと、リスク管理がなっていないと怒られそうだけど、シリウスと2人で回りたいわ」

「ふむ、オレと一緒にいて、お前が危険に陥る可能性はゼロだ。いいだろう。今日はお前も変装しているし、オレも騎士服を着用していないから、建前を守ってぞろりと騎士たちを引き連れる必要はない」

確かにシリウスは騎士団以外の用事で出掛けていたため、珍しく貴族服を着用していたけど、そういう問題なのかしら？

そう首を傾げたものの、シリウスが受け入れてくれたのならばいいわよね、と顔をほころばせる。すると、目の端で、成り行きを見守っていたカーノープスとシエアトが、騎士の礼を取るのが見えた。

突然どうしたのかしらと見つめていると、2人はこちらに顔を向けたまま数歩下がった後に身を翻し、解放された罪人のように素早く走り去っていった。

そのあまりの早さに驚いていると、距離ができたところでシエアトが立ち止まり、頭の上で両腕を伸ばして大きな丸を作る。

「どうやら、シリウスの機嫌を直した私の言動を評価してくれたらしい。」

「シリウス、シエアトに褒められたわ」

「そう言うと、シリウスはおかしそうに笑いながら、私を地面に下した。」

「よかったな。ところで、抜けていた腰は戻ったか？ 立てなければ抱えて歩くが」

「大丈夫よ」

「そう答えはしたものの、思うところがあつて彼の腕に手を掛ける。」

「でも、ふらつくといけないから、腕を組んでもいい？」

「ああ」

私を見下ろすシリウスの瞳がいつになく優しく見えたため、私はぎゅううつと彼の腕に強くしがみついた。

「シリウス、1つだけ聞いてもいい？ あなたはさっきのように、知らない女性に声を掛けることがあるの？」

「あるわけがない。あれはお前だと分かっていたから声を掛けたままだ」

「即答された内容に安心して、私は長い息を吐く。」

「よかったわ。あなたが手馴れている気がして、心臓がずきずきしていたの。シリウス、私が腰を抜かした理由の半分は、思ってもみない扱いをされたためだけれど、もう半分はあなたが普段から女性に声を掛けているのかもしれない、と考えてショックを受けたからよ」

「それは悪いことをしたな」

シリウスはバツが悪そうな顔を見ると、素直に謝罪してきた。

「そのため、私も素直に心の裡を声に出す。」

「ねえ、シリウス、『どうしてもその女性とできない』ということ以外は、私としてね？」

シリウスは不服があるそばかりに、片方の眉を上げた。

「セラフィーナ、お前の言葉には語弊がある。それがどんなことであろうとも、ともにやりたいと思うのはお前だけだ。オレはお前以外の女性に時間は使わない」

「真摯な表情で言い切られたため、私の心臓がとくりと高鳴る。」

けれど、なぜだかそのことを気恥ずかしく感じたため、誤魔化すように明るい声を上げた。

「そうよね、幼い頃からずっと一緒だから、私が相手だと勝手が分かって楽なものね。いいわよ、

あなたのやりたいこと全てに私が付き合うわ！」

シリウスはしばらく無言で私を見つめていたけれど、心の底からといった大きなため息をついた。「……どうやらオレは、お前の育て方を間違えたようだな。お前はオレ以外の者に、今と同じセリフを言うんじゃないぞ」

まあ、シリウスったらおかしなことを言うわね。そんなことをするはずがないじゃない。

「言わないわ。私が何でもお相手するのはシリウスだけよ」

私の言葉を聞いたシリウスは安心するかと思ったのに、さらに深い皺を眉間に寄せた。

「……………くっ、本当にオレは、お前の育て方を間違えたようだな。セラフィーナ、お前は発する言葉の意味を理解するまで、二度と同じことを口にするな！ オレが相手であつてもだー！」

「もちろん、自分が発した言葉の意味くらい分かって」

「いない！ オレのやりたいことの範囲をお前は絶対に理解していない！！ お前は……」

言いかけた私の言葉に被せる形で、シリウスから言葉が続けられる。

シリウスの我慢ならないといった態度を見て、延々とお説教が続きそうな雰囲気を感じ取った私は、これはまずいと慌てて口を閉じた。

それから、彼の腕を掴んでいた手に力を籠めるとまっすぐ見上げ、にこりと微笑みかける。

「だったら、シリウスが私に教えてちょうだい？」

シリウスはしばらく私を凝視した後、脱力したかのように肩を落とした。

「……………お前は、どこでそんな手管を覚えてくるんだ」

そう言うと、シリウスは私の肩に頭を乗せる。

「セラフィーナ、オレの惨敗だ」

わあい、勝ったわ。

などと言える雰囲気ではなかったため、私は無言で彼の頭をよしよしと撫でた。

それから、少しだけ顔を上げて恨めしそうに見つめてくるシリウスに笑顔を向ける。

「じゃあ、私の勝ちをあなたにあげるわ。あなたのやりたいことの範囲は理解していないかもしれないけれど、私のあげたいものの範囲は理解しているから。シリウス、私は本当にあなたが大好きなのよ。だから、私が持っている価値があるものは全て、あなたにあげたいの」

シリウスは何かに耐えるかのようにぐっと奥歯を噛みしめると、弱々しい声を出した。

「……………それ以上は勘弁してくれ。お前が分かっていることを理解していても、オレがもたない」

それから、シリウスは最近お決まりとなった呪文を唱え始める。

「いいか、オレは赤盾近衛騎士団長だ、赤盾近衛騎士団長だぞ！ 落ち着けー！」

しばらくの後、シリウスは気分を変えるかのように頭を振ると、途方に暮れた様子で夜空を見上げた。

彼の視線の先では、煌々と月が照っていたため、シリウスがぼつりと呟く。

「……セラフィーナ、月が綺麗だ」

そう言われて見上げたお月様は、隣にいる銀髪の騎士と同じ色に見えた。

そのため、頭上で輝く月がシリウスと重なり、私の目にはこれ以上ないほど美しく映る。

「ええ、とっても綺麗ね」

この月はシリウスの目にどんな風に見えるのかしら、と思いながら私はそう答えた。

それから、もう1度視線を下げると、月光を受けてきらきらと輝く銀髪白銀眼をしたシリウスに微笑みかけたのだった。

——地上にある私の月もとっても綺麗たわ、と思いながら。